

# 「リーディングス 日本的高等教育」(全八巻、玉川大学出版部)完結によせて

▼「リーディングス」日本の高等教育「全八巻、A5判三五〇頁、全本各巻四五〇〇円、玉川大学出版部

▼1 中村高康編「大学への進学」選抜と接続」2 杉谷祐美子編「大学の学び」教育内容と方法」3 橋本敏市編「大学生」キャンパスの生活」4 小方直幸編「大学から社会へ」人材育成と知の還元」5 阿曾沼明裕編「大学と学問」知の共同体の発展」6 村澤昌雄編「大学と国家」制度と政策」7 米澤彰純編「大学のマネージメント」市井と組織」8 島一則編「大学とマネー」経済と財政

## 「リーディングス 日本的高等教育」とは

21世紀に入ってから、わが国的高等教育やそれを取り巻く諸環境は、きつとその変貌のスピードを加速化させている。このなかで高等教育研究はその激変への対応に燃えだしく、これまでの研究蓄積への批判的自省と学問的問い直しは機会を捉えて充分であったとは言えない。ここで敢えて立ち止まり、数々の諸研究を振り返り、それを踏まえてさらなる発展と飛躍を試みる必要がある時にあるのではないかと。

## 編集と全体の構成

橋本と阿曾沼とのあいだで、リーディングス刊行の構想が立ち上がったのが、2008年の年末であった。それ、それ大学の授業で高等教育論を担当する経験から、各分野の代表的な論文を集めて、シリーズとしてまとめたものができないうかが、というのが発端だった。具体的な形になっていくのは翌2009年の春頃からだ。それまでに、お世話になっていた玉川大学出版部の成田隆昌氏に相談をし、何巻ほどのシリーズにするか、また各巻に所収する論文数はどのくらいか、という

議論は同本程度か、などとも、理論研究もあれば現場での実践論もある、政策志向的の案もあろうとしながら、都なラフプランもあればジャーナルティックな報告類などもある、といった具合に突進し、各巻の構成や分担者なども次第に形あるものになっていった。こうして若輩から中堅の研究者の先生方に各巻おひとりの編集をお願ひし、また広島大学高等教育研究開発センターの「大学論集」や「教育社会学研究」などではこれまでも研究論文のレビューが行われており、真近では他の出版社から同種のリーディングス(こちらは「学芸」)が刊行されていたため、それぞれに差異化するのかわい

う問題もあった。そこで、最初から各巻ごとのテーマを決めて論文を選挙するのではなく、4から5部から構成される各巻の内容と構成が決定したのは、2009年の9月頃であった。各巻の内容と編者については以下の通りである。

第1巻「大学への進学」 選抜と接続(中村高康編)  
第2巻「大学の学び」 教育内容と方法(杉谷祐美子編)  
第3巻「大学生」 キャンパスの生活(橋本敏市編)  
第4巻「大学から社会へ」 人材育成と知の還元(小方直幸編)  
第5巻「大学と学問」 知の共同体の発展(阿曾沼明裕編)  
第6巻「大学と国家」 制度と政策(村澤昌雄編)  
第7巻「大学のマネージメント」 市井と組織(米澤彰純編)  
第8巻「大学とマネー」 経済と財政(島一則編)

こうして生まれた本リーディングスは、高等教育のさまざまな領域にわたる重要な論考を掲載しているが、同時に戦後60有余年にわたる日本の高等教育を取り巻く時代背景や社会状況をも通観できるよう、各時期が有していたリアリティを浮かび上がらせるよう、各論考にも取り上げた。つまり戦後日本の高等教育を概観するのに役立つだろう。

だがそれだけでなく、各巻の編者は、現在の日本の高等教育がどのような位置にあり、どのような方向に進むものか、という問題意識を常に持ちつつ編集を行った。また、諸外国の高等教育に関する論議は対象としていないものの、高等教育の国際的動向を視野に入れた編者を行った。というよりも現在の日本の高等教育が国際的動向を無視できない以上、そのせざるを得ない。例えば、高等教育の大衆化、大学教育の変容、大学生の変化、大学教育と職業との関係の変化、研究機能の変容、国家との関係の変化、大学の市場化や大学経営の変容、大学教育の財政的基盤の変容などは、国際的動向を無視して語ることはできない。このため読者は、日本の高等教育が置かれてくる現状を理解しつつ、今後の在り方について歴史・国際的な視野から思いを巡らすことができるだろう。

その作業を助けるのが「解説」と「解説」である。上述したように各巻には「解説」を設け、それぞれの領域をどのように理解すべきか、巻の内部がどのように構成されているのかを説明し、さらに各巻の内容を踏まえて、各論考の内容を踏まえて、各論考の位置づけや意義、戦後日本の高等教育の流れとの関係などについて解説を行っている。所収できなかった論文・論考についても、各巻の「解

説」でできるだけ言及し、そのあとに「参考文献」として掲げることとした。このため本リーディングスは8つの領域をたてているが、どの巻がどの手にとってもらっても、その巻のテーマについては、一通りの基本知識と社会背景が理解できるようになっている。

そうした問題意識の下、わが国的高等教育領域における問題群を区分けし、「解説」および「バック」で「解説」を加えながら、重要と思われる研究論文を所収したものが本リーディングスである。

その過程の中で、村澤昌雄、島一則などの各氏に声をかけ、各巻の構成や分担者なども次第に形あるものになっていった。こうして若輩から中堅の研究者の先生方に各巻おひとりの編集をお願ひし、また広島大学高等教育研究開発センターの「大学論集」や「教育社会学研究」などではこれまでも研究論文のレビューが行われており、真近では他の出版社から同種のリーディングス(こちらは「学芸」)が刊行されていたため、それぞれに差異化するのかわい

う問題もあった。そこで、最初から各巻ごとのテーマを決めて論文を選挙するのではなく、4から5部から構成される各巻の内容と構成が決定したのは、2009年の9月頃であった。各巻の内容と編者については以下の通りである。

第1巻「大学への進学」 選抜と接続(中村高康編)  
第2巻「大学の学び」 教育内容と方法(杉谷祐美子編)  
第3巻「大学生」 キャンパスの生活(橋本敏市編)  
第4巻「大学から社会へ」 人材育成と知の還元(小方直幸編)  
第5巻「大学と学問」 知の共同体の発展(阿曾沼明裕編)  
第6巻「大学と国家」 制度と政策(村澤昌雄編)  
第7巻「大学のマネージメント」 市井と組織(米澤彰純編)  
第8巻「大学とマネー」 経済と財政(島一則編)

こうして生まれた本リーディングスは、高等教育のさまざまな領域にわたる重要な論考を掲載しているが、同時に戦後60有余年にわたる日本の高等教育を取り巻く時代背景や社会状況をも通観できるよう、各時期が有していたリアリティを浮かび上がらせるよう、各論考にも取り上げた。つまり戦後日本の高等教育を概観するのに役立つだろう。

だがそれだけでなく、各巻の編者は、現在の日本の高等教育がどのような位置にあり、どのような方向に進むものか、という問題意識を常に持ちつつ編集を行った。また、諸外国の高等教育に関する論議は対象としていないものの、高等教育の国際的動向を視野に入れた編者を行った。というよりも現在の日本の高等教育が国際的動向を無視できない以上、そのせざるを得ない。例えば、高等教育の大衆化、大学教育の変容、大学生の変化、大学教育と職業との関係の変化、研究機能の変容、国家との関係の変化、大学の市場化や大学経営の変容、大学教育の財政的基盤の変容などは、国際的動向を無視して語ることはできない。このため読者は、日本の高等教育が置かれてくる現状を理解しつつ、今後の在り方について歴史・国際的な視野から思いを巡らすことができるだろう。

その作業を助けるのが「解説」と「解説」である。上述したように各巻には「解説」を設け、それぞれの領域をどのように理解すべきか、巻の内部がどのように構成されているのかを説明し、さらに各巻の内容を踏まえて、各論考の内容を踏まえて、各論考の位置づけや意義、戦後日本の高等教育の流れとの関係などについて解説を行っている。所収できなかった論文・論考についても、各巻の「解

説」でできるだけ言及し、そのあとに「参考文献」として掲げることとした。このため本リーディングスは8つの領域をたてているが、どの巻がどの手にとってもらっても、その巻のテーマについては、一通りの基本知識と社会背景が理解できるようになっている。

また、諸外国の高等教育に関する論議は対象としていないものの、高等教育の国際的動向を視野に入れた編者を行った。というよりも現在の日本の高等教育が国際的動向を無視できない以上、そのせざるを得ない。例えば、高等教育の大衆化、大学教育の変容、大学生の変化、大学教育と職業との関係の変化、研究機能の変容、国家との関係の変化、大学の市場化や大学経営の変容、大学教育の財政的基盤の変容などは、国際的動向を無視して語ることはできない。このため読者は、日本の高等教育が置かれてくる現状を理解しつつ、今後の在り方について歴史・国際的な視野から思いを巡らすことができるだろう。

# 日本の高等教育研究を 集大成したアンソロジー

研究蓄積をふりかえり、新しい研究視座を提示する

橋本敏市  
東京大学大学院教育学研究科准教授

阿曾沼明裕  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授



「リーディングス」日本の高等教育「全八巻、A5判三五〇頁、全本各巻四五〇〇円、玉川大学出版部